

【泉大津市長賞】

母との思い出

中村紀子・泉大津市

リンキングミシンの音が聞こえる。母の踏むミシンの音である。

「ただいま。」

学校から帰ってきた私は、仕事をする母のそばで、何時間でもその日の出来事を話した。友達の事、先生のこと、おいしかった給食のこと、テストの事、喧嘩をした事、母にはどんなことでも話せた。

母はミシンを踏みながらも、私の話を聞いて相槌を打つたり、頷いたり、時には一緒に悩んでくれたりした。話を聞きながらも母の手は休みなく動き、次から次へと何枚ものセーターを仕上げていった。

母の仕事はセーターの身頃と衿とを一目の狂いもなく縫い合わせるというリンキングミシンの仕事である。

無数にあるミシンの針に、セーターの身頃の目と、衿との目を、一目ずつ通して縫い合わせるという、正に職人技である。

クールネック、

ブイネック、

ハイネック、

タートルネック、

ヘンリーネック、

どんな衿でも、どんなに細かなゲージの目であっても、母の手にかかると、あつという間に仕上がってしまう。

母の手は魔法の手である。

ピアノを弾く人が、いちいち鍵盤を見なくとも弾けるように、ハープを奏でる人もそれであるように。

母はリンキングミシンの無数の針の位置をその指の感触で覚えていたのだと思う。そんな仕事をする母のそばで、私は育つた。

母と話をしながら、セーターを裏返したり、たたんだり、捨て糸と言われるいらぬ糸をほどいたりと、ちょっとしたお手伝いをして褒めてもらう事がとても嬉しかった。家には毎日、織屋さんが来ては、セーターを運んでいた。

ライトバンの止まる音。ドアの開く音。

「ここにちは、まいど。」

「ありがとう。」

「御苦労さま。」

そんなやり取りの毎日があった。

母の老眼がすすみ、セーターの一目が見えにくくなつて仕事を辞めるまで、母だけなく、私自身もたくさんの人と出会う機会が出来た。

泉大津は毛布の街、セーターの街、ニットの街である。毛布はもちろんの事、たつた一枚のセーターが出来るまでにも、たくさんの人々の手を介す。撚糸、紡績、染色、ミシン、アイロン、検品、分業の街である。

その仕事の一つの担い手が母であった。

近年、リンキングミシンのできる人が少なくなつてきているという。

難しい技術だと思う。根気がなくてはなかなか手に入れる事の出来ない技術だと思う。到底私には出来ない事である。

けれど、母がその技術を手に入れてくれたからこそ、私はいつも母のそばで寂しさとは無縁の生活ができた。

楽しいときは、一緒に声をあげて笑い、悲しいときは、励ましてくれて、悔しいときは、黙つて聞いて頷いてくれて。

私はミシンを踏む母の横顔を見て、そしてミシンの音を聞きながら、火照った感情を冷ましていく事もできた。

毎日訪れる織屋さんとの出会いの中で、自然に人との接し方を覚えた。

私は、結婚数年後にこの市に帰ってきた。

やはり泉大津市はいい。ガチャガチャとなつている工場の音。シューシューとなつているプレス工場の音。思い出がよみがえる。

様々な理由で廃業に至つた工場もある一方で、新しく近代的に建てられた工場や会社もある。

泉大津駅の再開発、市内の道路の拡張工事、もうすぐ完成する松の浜駅、街は新しく姿を変えた。そして新しく近代的な纖維の街となつた。

私は分からぬが、もしかすると、時代が変わり、リンキングミシンも形が変わつてゐるのかも知れない。またもしかすると、母のような職人技が無くとも、コンピューターを使って、縫製が出来るようになつてゐるのかもしれない。

それでも、まだまだ泉大津には小さな町工場がたくさん残つてゐる。そしてそれぞが昔ながらの分業を担つてゐる。

きっと、私がかつてそうだったように、母親や父親の仕事を見て育つてゐる子供達がいる事と思う。いや、いてほしい。

そう、今もこんな声が聞こえる気がする。

「ただいま。」

「おかえり。」